

「菓子栞」・創作大学銘菓ワークショップ

——メディア授業におけるグループワークの試み——

兼岡理恵

はじめに

「菓子栞」とは、箱詰の菓子などに入っている、菓子の素材や由来などを説明した紙片のことである。筆者は、この菓子栞に書かれた菓子の由来や、菓子にまつわる歴史、伝説などに着目して研究・授業を行ってきた¹⁾。授業については、これまで駒澤大学文学部国文学科(国文学特講)、青山学院大学総合文化政策学部(文化基礎演習)、成蹊大学文学部日本文学科(古代日本文学講義)、同・国際文化学科(演習)などで実施、千葉大学では二〇一四年度文学部開講科目「民俗・伝承論b」で講義を行った。そして二〇二〇年度は、普遍教育地域科目(基礎)「菓子栞から地域をひもとく」(第二ターム)として開講した。そのシラバスは次の通りである。

日本各地には、その地の歴史・伝説にちなんだ名物が多く存在する。その中でも特質すべきは「お菓子」だろう。八ッ橋、安倍川餅、きびだんご……そして、それらの多くには菓子の由来や、菓子開発者の苦労、味へのこだわりなどが書かれた「菓子栞」が添えられ、菓子の美味しさを引き立てている。この「菓子栞」は、

他国ではあまり見られない、日本文化の一つとも言えよう。

本講義では、菓子菓をてがかりに、菓子にまつわる伝承、土地と菓子のむすびつき、菓子菓の制作背景など、様々な角度から考察するとともに、菓子菓に関するワークショップを行う。

傍線部「菓子菓に関するワークショップ」とは、あるテーマを設定し、それに基づく菓子・菓子菓を制作する、いわば「仮想・商品開発」である。これまでの授業で扱ったテーマは、各大学・学生の専門に合わせ、たとえば『古事記』『日本書紀』におけるヤマトタケルとオトタチバナヒメのエピソード（駒澤・国文学科、成蹊・日本文学科）、「外国人向け・日本のお土産としての菓子」（成蹊・国際文化学科）などがあるが、いずれの大学でも必ず行ってきたテーマがある。それは「新・大学銘菓」である。大学銘菓とは、各大学が大学グッズの一環として制作した菓子のことで、学生には自分の大学をアピールすべく、新たな大学銘菓・菓子菓を考案してもらおうというものである。菓子菓ワークショップによって期待される学習効果として、①菓子・菓子菓を制作するためには、そのテーマに対する様々な知識が必要であり、学生が主体的に学ぶ契機となる。②パッケージや菓のデザイン、菓本文の作成等、デザイン・文章表現の練習になる。③考案した作品をアピールするための効果的なプレゼンテーション能力の育成、などがあるが、「新・大学銘菓」制作においては、大学について、その歴史や特色などが再認識できる、大学所在地周辺の特産物や歴史など、地域についての理解が深まることなどが挙げられよう。筆者がこれまで行ってきたワークショップの流れは、まず学生個人で「菓子・菓子菓」案を作成させ、その後、グループで各自の案を持ち寄って検討、授業内・外の活動によって各グループごとに一作品を制作してプレゼンテーションを行い、最優秀「菓子・菓子菓」を投票で決定、というものであった。しかし今回、新型コロナウイルス

ルス感染拡大によってメディア授業となり、通常の方法によるワークショップが不可能となってしまった。当初は中止も考えたが、これまでの実践・学習効果等を考え、メディア授業におけるワークショップ実施に挑戦することにした。本稿は、その授業報告である。

一、授業の概要

1、登録者数

はじめに、本授業（普遍教育地域科目〔基礎〕「菓子栞から地域をひもとく」）の概要を示す。

一 二九名。【内訳】教育学部：八二名（一年 八〇名、二年 二名）、理学部：四一名（すべて一年）、工学部：二名（三年 一名、四年 一名）、法政経学部：二名（三年 一名、四年 一名）、国際教養学部：二名（三年 一名、四年 一名）

本授業は、一年生は学部学科指定科目で、例年ならば抽選による人数制限があるが、今年度は新型コロナウイルスによる入構禁止等により抽選が行えなかつたため、受講希望者をすべて受け入れることになった。

2、授業実施方法

Moodleによるオンデマンド型。ただし大学銘菓ワークショップのグループワークはTeamsにて実施（後述）。講義は、音声付きスライドにて行い、適宜、資料等を配布した。

3、授業スケジュール

第一回 ガイダンス

第二回 菓子菓の研究方法・大学銘菓ワークショップについて

第三回 講義（菓子菓をひもとく①・「手児奈の里」（千葉・市川ちもと））

第四回 講義（菓子菓をひもとく②・「つきいれ餅」（宮崎・金城堂））

第五回 創作大学銘菓ワークショップ発表・投票

第六回 創作大学銘菓ワークショップ投票結果発表・まとめ

授業内容は大きく分けて、第一・二回：ガイダンスの内容、第三・四回：菓子菓研究に関する講義、第五・六回：創作大学銘菓ワークショップ、となる。このうち第三・四回の講義は、筆者の菓子菓研究の一端を紹介するもので、授業では「歩く編」「ひもとく編」という二本の音声付きスライドを用意、「歩く編」では筆者が現地を訪れた際の写真や入手資料などをもとにテレビの旅番組風（学生からはNHKの「プラタモリ」、あるいは「Eテレ」風、などと評された）のスライドとし（扱った地域は、第三回：千葉・市川市、第四回：宮崎県日向市美々津町、宮崎市周辺）、「ひもとく編」では、菓子菓の内容等に関する分析・考察という形式にした。本来ならば一ターム・八回の授業回数が、今回は六回となったため、この菓子菓研究に関する講義回数を減らさざるを得なかった。これまで他大学で行った菓子菓授業は半期、あるいは通年開講で、多くの菓子菓事例を紹介することが出来、それはワークショップにおける創作菓子・菓子菓の成果にも繋がっていたことを実感していただけに、今後、千葉大学で菓子菓授業を行う際は、半期での開講も実施したいと考えている。

4、教材

① デジタル教科書『「菓子葉」集』の活用

筆者は以前、自ら収集した菓子葉を研究や授業で活用するため、千葉大学アカデミック・リンク・センター共同研究部門の協力によって約百点の菓子葉を電子化し、それらを元に『菓子葉』集（冊子版および電子版〔EPUB版、pdf版〕）を制作した²。そして各大学の授業において、学生に冊子版・電子版の両者を配布し、どちらが使いやすいか、それぞれの長所・短所等アンケートを行ったところ（二〇一四～二〇一五年度実施）、いずれの大学でも冊子版の方が良いとする意見が多かった。その理由として「書き込みが出来る」「やはり本は紙が良い、紙の方が読みやすい」などが挙げられた。一方、電子版については、多くの学生はスマートフォンで閲覧するため「画面が小さく」見づらい」「いちいちスマホ上で開くのが面倒」など、必ずしも評価は高くなかった。しかし今年度の授業では、学生へ直接冊子版を配布することが出来ないため、必然的に電子版のみの利用となった。電子版の長所として、冊子版は予算の関係でモノクロであるのに対し、電子版はカラーで見られること、また各菓子店舗HPのURLにリンクさせており、それらを調べることが出来ること、などが挙げられる。実際、今年度利用した学生からも「カラーで見えていて楽しい」「教科書から店のHP、さらにそこで気になったことをネット上で調べる等、展開できるのが良い」などの声が寄せられた。また本教材制作当時と比べて、ノートパソコンやタブレットを所有する学生も増加したと考えられ、制作当初はあまり学生に受け入れられなかった電子版が、メディア授業においては大いにその利点を発揮することとなった。

② 「菓子葉アーカイブ」の設定

Moodle上に、筆者所蔵の菓子葉データ約百点を、日本地域別にフォルダに分けてアップし、学生が自由に閲覧できるようにした。これは、そもそも多くの学生、いや一般の人々は「菓子葉」をじっくり眺める機会もなく、具体的なイメージを掴みにくいと思われるからである。また学生からの菓子葉報告・情報を投稿する「みんなで作る菓子葉アーカイブ」を「フォーラム」として設定したが、授業回数も少なく、学生は他の課題等もあるためか、こちらは活用することが出来なかった。

二、グループワーク「千葉大学・創作大学銘菓ワークショップ」について

1、大学銘菓についてー概要・ワークショップの説明（第二回授業）

第二回授業において、首都圏のいくつかの大学銘菓の事例を示した上で、千葉大学の大学銘菓を紹介した。現在、千葉大学には「ピーナツせんべい」（豆処はせべ）、「ピーナツサブレ」（ピーナツサブレ本舗 とみい）、「落花生バイ」（蓮香堂）、「千葉大e-maのと飴」（UHA味覚糖）、また二〇一九年より販売が開始された「千葉大学クッキー」（コロンバン）がある。この中で「ピーナツせんべい」には以前、名刺大の菓子葉が入っており、表おもて面にけやき会館の写真、裏面には次のような文章が書かれていた。

千葉大学では、全9学部（※現在は10学部 筆者・注）からなる総合大学です。緑にあふれた広いキャンパスで、学間にサークルにと、たくさんの方が充実した学生生活を満喫しています。「つねに、より高きものをめざして」という理念のもと、創造的な教育・研究活動を通しての社会貢献を使命とし、学生とともに

に千葉大学は挑戦しつづけます。

千葉県は落花生が特産。このせんべいは(株)はせべが千葉大学のために製造しているものです。

このうち傍線部の記述は「教育・研究活動」「学生とともに」「千葉大学は」とあるように、主語が「千葉大学（あるいは教員）」となっている。これは、様々な大学が学生による大学銘菓（たとえば南九州大学のサツマイモを素材とした菓子、「若紫」など）を制作する昨今、大学のアピールのためにも、学生開発の大学銘菓、「学生目線」によって作成された菓子菓が欲しいところである。また「千葉大学クッキー」（コロンバン）にも菓は入っているものの、その内容は、このクッキーの原型（元の商品）である「フルセック」の説明であり、千葉大学については言及されていない。また「フルセック」は、多くの大学が大学銘菓に採用しているため、大学独自色という点でもやや弱いものがあろう。学生には以上のような現状をふまえた上で、ピーナッツだけではない千葉県の魅力、そして千葉大学の特色が全面に出るような新・大学銘菓を制作すべく、本ワークショップの意図を説明した。

2、実施方法—Teamsの利用

グループワークに先立ち、まず、これまで一度も顔を合わせたことのない学生同士の交流を促すため、Moodleで三〜四名のグループを作成し、グループチャットを行わせた（第二〜三回授業）。しかしMoodleでは、LINEなどと異なり、いつグループメンバーがチャットを投稿したのか分からず、Moodleに定期的にアクセスし、チェックせねばならない。さらに会話が行えないためチャットが盛り上がらない、などの理由から、あまりうまく機能しなかった。

そのため、当初Moodleのグループフォーラム、Wiki等の利用を検討していた大学銘菓ワークショップ・グループワークを、Teamsで行うことに変更した。具体的には、Teamsにおいて筆者が学生の利用者番号により三〜四名編成の「チーム」を作成、三九の「菓子菓グループ」チームを設定し、第三回授業時に「グループ一覧表」を配布した。グループ編成にあたっては、様々な学部が受講する普遍教育授業の特徴を生かし、できるだけ複数学部の混合になるよう留意した。またそれまでの履修状況（動画閲覧・課題提出状況）により、受講状況が良くない学生には、Moodleメッセージにてグループワーク参加の意志を確認した。これはグループワーク実施に先立ち、学生からグループワークに対する意見（実施にふさわしい人数・グループワーク実施をどう思うか等）をアンケートした際（第二回授業）、「参加に消極的な人がいると、非常にやりづらい」という声があったためである。

学生にはTeams利用に際しビデオ通話も可とし、各グループでやりやすい方法（チャット、ビデオ通話）を相談させ、活動するよう指示した。また筆者は、各グループのTeams上の活動状況を定期的に確認し、アクセスしていない学生には、Moodleメッセージで個別に連絡をし、参加を促した。なおTeamsは、学生のグループワーク活動のみに利用し、通常の授業は、これまで通りMoodleにて行った。

3、作品制作・プレゼンテーション方法

従来の対面授業における菓子菓ワークショップのプレゼンテーションは、各グループごとに自由とし、パワーポイント、紙芝居、ポスター、実物（模型、あるいは試作品（+試食））提示等、様々な方法で行われていた。

しかし今回は、筆者がパワーポイント・フォーマットを用意し、「スライド四枚以内、アニメーション・音声

なし」とした。これは提出時のファイル容量の問題、また発表時、各作品のスライド枚数が多いと、約四〇のグループ作品を閲覧するのに非常に時間がかかるという理由からである。そして提出はMoodleの「課題」により、グループの代表者一名が行うこととした。

4、作品発表・投票（第五回授業）

提出された作品をpdf化し、三つのファイル（一ファイルにつき二三グループの作品）に分けて閲覧できるようにMoodleにアップし、「総合」「菓子葉」の二部門について、それぞれ一つずつ選び、その選定理由とともに「フィードバック」に回答する形式で投票を行った。特筆すべきは、この短い授業期間、さらにオンライン上のグループワークという慣れない環境の中、提出期限を過ぎたグループもあったものの、全三九グループが作品を完成出来たことである。グループワーク実施にあたり、学生同様（あるいは学生以上に）不安を抱えていた筆者にとって、全作品を受領した際には安堵するとともに、学生たちの集中力、パワーに心から感動した。

5、結果発表・まとめ（第六回授業）

投票者一一七名（学生、およびTA）からの投票をまとめ、授業スライド内では「総合」「菓子葉」各部門の一〜三位を発表、講評・表彰式（画面に賞状を掲示して筆者が読み上げ、表彰式風の音楽を流した）を行った。また投票結果・学生のコメント・感想は、別途ファイルにまとめMoodleにアップした。以下、上位作品をいくつか紹介する。

〔総合〕

一位 「10学部10色のこんぺいとう」【図1】

「菓子葉」・創作大学銘菓ワークショップ——メディア授業におけるグループワークの試み——

千葉大学コミュニケーションマークと似た形状の金平糖をモチーフとし、千葉大学の十学部を十色十種類の味（ピーナッツ、梨、苺、サツマイモ、ブルーベリー、抹茶、ソーダ、ブドウ、オレンジ、桃）で表現した。容器は透明プラスチック製瓶で、瓶首にコミュニケーションマーク形の菓子葉を結びつけ、同マークが記された巾着に入れ「高級感」（学生によるスライドの説明文による）を出したものとなっている。

（学生からのコメント）

・「千葉大学の学部注目している点が新鮮に感じた。本文中の学部説明で、祖父や祖母などに自分の学んでいることを伝えられると思った。また、千葉の名産品で十味を構成していることもよいと思った」
 ・「可愛らしい入れ物や巾着、金平糖という「インスタ映え」に最適とも言える要素が多くあっても好印象だった。幅広い年齢層に受け入れられそう」

二位「チバニアン」

「千葉が新時代を切り開く」というキャッチフレーズのもと、二〇二〇年に命名された地質年代区分「チバニアン」と、様々な分野で新しい時代を切り開いていく千葉大学を重ねている（さらにチバニアンの調

コミュニケーションマークのシルエットと似たこんべいとうを千葉大アピールのために採用

【内容】千葉大の10の学部を表す10色10種のこんべいとう

【味】ピーナッツ、なし、いちご、さつまいも、ブルーベリー、抹茶、ソーダ、ブドウ、オレンジ、もも
 （太字：千葉県の名産品）

【容量】50g

【価格】750円

【外装】プラスチック製の瓶型容器に入れ、瓶首に菓子葉を結び付ける。高級感を出すために千葉大マークつきの巾着でつむむ。

【想定購入シーン】帰省の際に家族へのお土産

【図1】「10学部10色のこんべいとう」

査・研究には本学教員も携わっている)。菓子葉は、地層をイメージしたチョコレートベースのミルフィーユ、さらに上部には鉱物をイメージしてピーナッツをのせる。菓子葉は地層のイメージで蛇腹折りにしたものである。(学生からのコメント)

・「チバニアン」の研究・調査に、千葉大学が関係しているというのはアピールできる。菓子葉を蛇腹にして地層のイメージを表現するのも面白い」

〔菓子葉部門〕

一位「ちばあむ」【図2】

総合大学である千葉大学において、たくさん
の学部が一体となり「輪になって」学ぶと
いうイメージから、十の学部を十色で表現し
たカラフルなバームクーヘン。また中央部
には千葉県特産落花生「千葉Qなつつ」(甘み
が強く菓子に向いた品種とされる)を使用。
キャッチフレーズは「繋がる輪、広がる学
び」。菓子葉は、コミュニケーションマ
ーク(赤)をモチーフに、木をイメージした茶色
地を重ね合わせ、毛筆(手書き)による本文

菓子葉

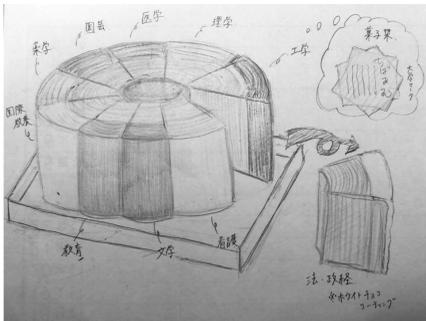
- ・台紙には、千葉大学のマークを使用。
- ・手書きの文字により、親しみやすさを感じてもらおう。

ぜひ読んでみてください!! →



繋がる輪 広がる学び

- ・10の学部を10色で表現。
- ・内側の茶色い部分はQなつつ使用。



【図2】 「ちばあむ」(上：菓子葉 下：菓子)

が示される。

(学生からのコメント)

・「手書きの菓子葉はやはりインパクトがあり、親しみも感じられる。マークを模した赤い色紙に黒字で大胆に文字を書くという斬新さが印象的である。また十学部が手を取り合い、ひとつの輪となるというコンセプトも非常にポジティブで良いと思う。学生数が多く、学部数も多い千葉大学の特徴をよく捉えている」

・「かわいらしいバームクーヘンと、とても格好良い葉、そのギャップが良い」

二位「KIZNA PURE HONEY DORAYAKI」※総合部門でも三位

千葉大学環境健康フィールド科学センターで製造しているハチミツと、千葉県・鴨川の特産品であるレモンを使用したどら焼き。どら焼きの皮にはコミュニケーションマークの焼印がある。菓子葉本文は「1 千葉大学とは？」「2 KIZNA PURE HONEY DORAYAKIのこだわり」「3 はちみつのごだわり」「4 レモンのごだわり」、さらに「10学部にちなんで千葉大学の魅力を10個紹介」とし、「総合大学でいろいろな分野の授業が受けられる！」「緑が多くて癒やされる！」など十項目が示されている。

(学生からのコメント)

・「千葉大学や菓子についての説明はもちろん、食材のごだわりや千葉大学の魅力が、学生の目線から丁寧に紹介されている」

・「葉形状が二つ折になっており、写真や菓子の紹介等、画面構成もしっかりしている。それぞれの項目が具体的に書かれていて、読むと食べたくなった。オープンキャンパス等で千葉大学のことを知りたいと思っている

人に最適」

同点二位「千葉大ロシアまんじゅう」

園芸学部で栽培しているイチジク餡の饅頭。しかし箱中に一つだけ激辛餡を混ぜるというゲーム性の高い菓子。菓子栞本文は「亜米利加の“夢の国”が千葉に誕生する遙か昔、千葉はとんでもない“悪夢の国”だった……」と始まり、以下、古代〜中世における数々の戦乱（結城合戦、国府台合戦等）を挙げ、「この悪夢のような出来事を経て、この怨念がまんじゅうに乗り移り、あんなに美味しかった無花果が激辛に！果たして、その呪いを喰らうのは一体誰か？」「どきどきはらはら」「千葉大ロシアまんじゅう」、どうぞ召し上がれ」と結ばれる。

（学生からのコメント）

・「とにかく内容が面白かったです。脇目もふらず最後まで読みました。物語調になっていて、続きが気になる効果をもたらしていたのだと感じます。また、文字のフォントや栞の紙の色も本文にあっている」

・「千葉が誇るデイズニーツートから始まり、夢の国から悪夢の国へと変換させたのがすごいと思った。しっかりとしたストーリー性があって面白かった」

この他、一九二五年日本初のラジオ放送が、千葉大学工学部の前進・東京高等工芸学校の施設から行われたことにちなんだ「千葉大ラジオカステラ」、「千葉大学」と「大福」を掛け、千葉県の特産物である「梨」「落花生」「びわ」「ブルーベリー」の四種類の味を詰め合わせ、菓子栞は千葉県の形状で蛇腹折りにした「千葉大福」など、ユニークな作品が多数寄せられた。作品全体に対する学生のコメントでも「いずれもレベルが高く選ぶのに苦労した」「クオリティが非常に高く、一つ一つ見ていて楽しかった」「こんなアイデアもあったのか、と驚

きの連続だった」等、作品の完成度に対する驚嘆・称賛の声が多かった。さらに「普遍科目ということで、いろいろな学部の人たちの知識が集約された活動・作品になったと思う」という、様々な専門・関心を持つ学生が集まる普遍教育授業において、本ワークショップを開催することの意義を指摘するコメントもあった。

6、提出作品の傾向

作品全体の傾向として、主に次のような点が挙げられる。

- ①千葉大学マスコット・キャラクター「ニシ・イノ・マツ」の使用
- ②ピーナッツ以外の千葉県特産物（梨、びわ、スイカ等）の使用
- ③千葉大学の特色を生かしたもの（総合大学、日本唯一の園芸学部等）

①については、現在販売されている「千葉大学クッキー」（コロンバン）は、パッケージ（缶）に同キャラクターがデザインされているものの、クッキー自体のプリント（絵柄）は「千葉大学」と「弥生の鐘」であり、菓自体にはキャラクターが示されていない。マスコット・キャラクターの認知度を高めるためにも積極的に利用した方が良い、という学生の意見が多かった。また②は、筆者が授業スライド内で「脱・ピーナッツ大学！」を強調したせいもあるが、③とともに、地方出身者および一年生にとって、千葉県、千葉大学について理解を深める絶好の機会となったことが窺われる。

7、オンライン・グループワークに対する学生の感想・意見

グループワーク終了後、学生から寄せられたコメントには「会ったこともない人たちと活動することに最初は少し抵抗があったが、やってみると誰かと課題をするのは非常に楽しく協力して何かをすることの大切さを、今

このような状況だからこそ、「一層感じられた」(一年)、「メンバーで時間を指定してさまざまな草案を練ることができたので、総合的にも楽しく、やって良かった」(一年)という肯定的な意見が多かった。また「顔が見えない分、言葉に集中でき、しぐさや顔色などの余計なことに気を取られず、わざわざどこかに集まる必要もなく、それぞれ自宅で出来たのも利点だと思いました」(四年)という、対面には無い良さを指摘するコメントもあった。さらに「周囲に千葉大学の人が誰もいない状態で入学したため、このグループワークでのテレビ通話も、同じ大学の人と初めて話し、顔を見る機会となった。このような活動ができて良かった」(一年)というコメントには、このコロナ禍において改めて気づかされた「人との繋がり」の重要性、「普通に」会うことが、実は「普通」ではないこと、など、様々なことを考えさせられた。

その一方、「会ったこともない人といきなりグループワークを行うのは難しい」(一年)、「対面なら表情等から伝わる細かなニュアンスがわかりにくい」(一年)、「全く連絡が取れず、活動に参加しない人が居て困った」(一年)など、オンライン上でのコミュニケーションの難しさを唱えるコメントも少なくなかった。

8、授業運営上の課題

今回のオンライン・グループワークは、多くの学生たちのみならず、筆者にとっても初めての試みであった。そこから浮かび上がってきた課題として、次のようなものが挙げられる。

① 学生への指示・説明の難しさ、対面授業時以上の丁寧な説明の必要性

一例を挙げれば、筆者が作成・配布した作品提出用スライド・フォーマットに対し、そのフォーマットをどこまで加工してよいのか(デザインそのまま、色を変える位は大丈夫、同ファイルさえ使用すれば良く加工はOK、

等)、学生の解釈に幅があり、その結果、色やデザインをアレンジした他グループの作品を見て「フォーマットはあそこまで変えてよかったのか」というフォーマットの解釈を巡って、複数の学生から意見が寄せられた。これはひとえに筆者(教員)の説明不足に起因するものだが、これが対面授業ならば、授業内に質問が出たかもしれない。しかしメディア授業では、メッセージ、メール等で「わざわざ」質問せねばならず、学生にとって質問に対するハードルが高いという傾向がある。教員側はその点に留意した上で、出来るだけ丁寧な説明をするよう心がける必要がある。

② 学生の活動が見えにくい

対面授業では、授業中の教室循環、出欠状況などで把握できるが、オンライン(特にオンデマンド)では、学生がどのような活動を行っているか掴みにくい。Teamsにおけるグループ活動状況は、適宜チャットの様子などを確認していたものの、やはり限界があった。

③ 学生同士、教員・学生間の関係性の構築

恐らく、この③が最も重要かつ難しいものだろう。グループワーク成功の可否は、学生同士がいかに協同して活動を行えるにかかっている。対面授業ならば、学生同士、最低でも一度は教室で顔を合わせており、少なくとも同じ授業を受講している「仲間意識」は芽生えるだろう。しかしメディア授業(特にオンデマンド型)では、学生は教員と一対一で授業を行っている感覚が強く、他の受講生の存在は認識しづらい。学生同士、そして学生と教員が、いかにコミュニケーションを取り、信頼関係を築けるか、メディア授業における大きな課題といえよう。このように様々な課題が見えてきた本ワークショップであり、筆者も日々試行錯誤、失敗の連続であった。し

かし学生たちは、教員の失敗にも柔軟に対応し、素晴らしい作品を生み出してくれた。本授業を作り上げてくれた学生たち、支えてくれたTAに、この場を借りて心から感謝したい。

おわりに

本ワークショップは、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」——アクティブ・ラーニングの一例と言える。二〇二〇年は、二〇一六年一二月の中央教育審議会答申に基づき、アクティブ・ラーニングが本格的に実施される年となるはずであった⁴。しかし実際には、新型コロナウイルス感染拡大により各種学校は休校を余儀なくされ、授業再開後も、大学ではメディア授業が主流であることは周知の通りである。そのような中、これまで対面を基本としたアクティブ・ラーニングを、メディア授業でどのように行うか、今、アクティブ・ラーニング、そして大学教育は新たな課題に直面している。

アクティブ・ラーニングに関して筆者は、日本古典文学をいかに実践的に学ぶか、という観点から結成された古典文学研究者たちによる「日本文学アクティブ・ラーニング研究会」に参加し、ワークショップを行ってきた⁵。そのうち平野多恵氏（成蹊大学）とともにファシリテーターを務めた二〇一九年度ワークショップ「剣の謎にイドむ・剣クロニクルの編纂」をもとに、今回、本稿において報告した「菓子栞」授業と同じ二〇二〇年度前期、文学部開講科目「日本文学史a」（「草薙の剣」から読む文学史）のメディア授業（オンデマンド型）を行った。これはもともと対面で開催したワークショップを、メディア授業に応用したものである。

「菓子栞」・創作大学銘菓ワークショップ——メディア授業におけるグループワークの試み——

今後、メディア授業は大学における「新しい日常」となるだろう。メディア授業における学生の能動的な学びの方法を、これからも模索していきたい。

※本稿は、科学研究費補助金基盤研究C「高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究」(課題番号 19K00530 研究代表者：吉野朋美)の成果の一部である。

注

- 1 それらについては、拙稿「菓子栞研究に関する覚書」(『人文研究』四四 二〇一五・三) 参照。
- 2 その概要は、栃木博子・能登谷泰見・長丁光則・小野永貴「デジタル教材作成支援の実績(共同研究部門における活動)」(千葉大学アカデミック・リンク・シンポジウム「つながる学び…アカデミック・リンクのこれまでとこれから」二〇一四・十二・二二 於：千葉大学けやき会館)、藤原由季・菅野美香・能登谷泰見・鈴木敏幸・平野桃子・兼岡理恵「菓子栞デジタル資料集の開発と国文学授業への活用」(『日本デジタル教科書学会発表第五回年次大会』二〇一六・八・二〇～二二 於：京都産業大学)等にて報告された。
- 3 たとえば首都圏の大学では、東京大学・明治大学・青山学院大学・駒澤大学(現在は販売されていない)・東京理科大学・中央大学など。
- 4 渡部淳『アクティブ・ラーニングとは何か』(岩波新書 二〇二〇)「はじめに」(i頁)。
- 5 本研究会と第一回ワークショップの概要については、平野多恵「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ 和歌を演じるワークショップ」(『レポート筈間』五八号 二〇一五・六) 五～八頁 [筈間書院Blog http://kasamashoin.jp/2015/06/58_7.html] 参照。
- 6 同ワークショップ、およびそれ以前のワークショップについては、平野多恵・兼岡理恵「大・院・社会人連携によ

る古典文学ワークショップの試み…日本文学アクティブラーニング研究会主催 第五回ワークショップ「剣の謎にイ
ドむ…剣クロニクルの編纂」報告」〔成蹊大学文学部紀要〕第五五号 二〇二〇・三）参照。

「菓子栞」・創作大学銘菓ワークショップ——メディア授業におけるグループワークの試み——